

教員同士、生徒と学校をつなぐICT化により 授業に一層、注力できる環境を整備

背景と課題

業務の煩雑さの解消から 始まったICT化構想

生徒数約3000人、教員数約200人と大規模な近畿大学附属高校。いち早く授業にiPadを導入し、ICT教育の先進校として知られている。

同校のICT化の動きは、十数年前、教員の煩雑な業務を効率化しようというところから出発した。現在ICT教育推進室長を務める乾武司先生は、かつての状況をこう振り返る。

「紙ベースの情報管理が根強く、同じ情報を転記するような無駄な作業を日常的に行っていました。また、入試や進路などの情報は担当部署がそれぞれの方法で管理しており、継承や部署間の共有のしにくさも課題でした」

そんななか、乾先生は当初より教員、生徒、家庭が包括的につながるシステムの構築をイメージしていた。その完成に向け、何年もかけて、つひとつひのピースをはめていくようにICT環境を整備。その最後のピースが、現在の同校の

看板になっているiPadの導入に当たるといふ。

こうした一連のICT化は、教員の働き方を大きく変えた。何によってどう変わったのか、振り返ってみたい。

取り組み

データを二元管理し 教員がオンラインでつながる

同校のICT化は、大きく2段階に分けられる。その第1段階は、教員をオンラインネットワークでつなげる取り組みだ。2001年度、他校に先駆けて、全教職員に専用パソコンを配布。その後、生徒の個人IDにあらゆる情報を紐づけ、データベースを二元管理する校務システムを構築した。

手元のパソコンで入力したデータは、学校全体のデータベースにて二元管理。同じ情報を何度も記載するような二重作業が不要になった。分掌間のデータの共有もしやすくなり、大学入試用の調査書などを作成する際も、自動的に必要な数字を集めて出力できるなど、多くの事務作業が効率化された。

さらに、教員間の情報共有にも、オ

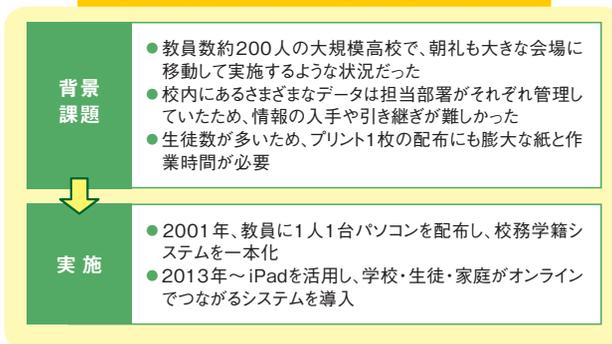
ンラインネットワークを活用。教員数の多い同校は、職員朝礼のたびに各所属職員室から全員収容できる大会議室への移動が必要だが、その頻度を、毎朝から週2回に減じることももつなげた。

「パソコンを配布した際は先生方からの反発もありましたが、実際に運用するうちに『便利になった』と言われるようになりました。煩雑さを排除する運用方法の工夫も含め、先生方の負担を軽減するための設計が大切だと実感しています」（乾先生）

iPad導入から一気に進んだ ペーパーレス化と授業改善

ICT化の第2段階は、生徒・家庭も含めたネットワーク化だ。乾先生は、登場間もないiPadの革新性に目を付け、13年度新入生からiPadを1人1台もつ体制を導入。校内のWiFi環境も整備し、ポータルアプリ「Cyber Campus」をシステム会社と共同開発。これは、お知らせ、映像・文書ライブラリー、アンケート、掲示板、スケジュール、メッセージなどの機能を搭

近畿大学附属高校の働き方改善のステップ



載したもので、各自のiPadを有効活用できるようにした。

当時はまだ学校でのiPad活用事例がなく、教員からは多くの反対意見があがったという。しかし、「前例がないからこそ挑戦する価値があるという経営判断があった」と乾先生。導入決定後は、教員の不安を払しょくするため、iPadの使い方について何度も講習会を実施。現在も、アップル社のオンラインシステム受講を支援する自主参加のフランクなイベント、「Apple Teacher Care」を定期的開催するなど、サポートを継続している。



ICT教育推進室長
乾武司先生



教頭
丸本周生先生



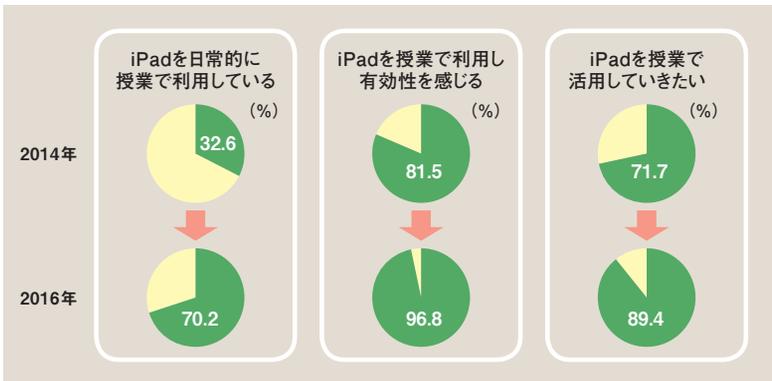
iPadを使った授業の様子。セキュリティ面に配慮しつつもできる限り制限を少なくすることで、生徒は授業に限らず学校生活の中で一つの文房具として自由に活用している。



多彩な機能をもつポータルアプリ「Cyber Campus」。映像や文書の「ライブラリ」にも簡単にアクセスできる。

アップル社「Apple Teacher」の認定バッジの取得を目指し、楽しみながら学ぶ「Apple Teacher Café」。

図1 iPad利用に関する同校教員のアンケート結果



こうして進めたICT化の第2段階では、生徒・保護者とのコミュニケーションが大きく変化した。生徒や家庭への諸連絡はネットワーク上でメッセージを流す操作一つで完了。生徒からのアンケートや課題などの回収もオンラインで実施。大幅なペーパーレス化につながり、印刷や配布、回収、集計の手間やコストが削減された。また、保護者は電話するほどではないとちょうどしたこともオンラインで気軽に連絡しやすくなり、学校側は大きな問題に発展する前の段階での状況把握や早期対応ができるようになった。

従来の授業ではいかにわかりやすく説明するかが大事で、定型化しやすかったのに比べると、授業準備の負担は大きくなった。一方で、事務作業は削減

「もとより本校には現場の裁量で動きやすい風土はありました。さらに、こうした授業改革で若手も力を発揮しやすくなったことが、教員同士の意見交換を活発にし、組織の風通しを良くしているようです」(教頭・丸本周生先生)

ICTツールによって、教員個人のアイデア次第で新しい授業の可能性が広がる。そこに面白さを見出す教員は多く、授業改革の波はトップダウンではなく現場主導で広がった。若手も率先して取り組み、現在、授業公開を頻繁に行いながら教員同士で切磋琢磨しているところ。

授業設計にかける時間の割合が増加

改善による効果

「私自身、次はどう生徒を動かそうか、そのためにどんなツールを使おうかと、授業設計のことで日々頭を悩ませています。しかし、そこに力を注げるのは、教員として幸せなことだと感じます」(乾先生)

今後については、成績評価へのICT活用など、新たなICT活用の可能性を探っていく同校。それによって教員の取り組み内容はさらに変わっていくとされているため、仕事の総量が増えているわけではない。業務時間の配分が、授業中心に変わってきたということだ。

PickUp キーワード

ICT化

働き方改善につなげるためのポイント

設計ビジョン

研修の充実

単にパソコンやタブレット端末を配備しただけでは、同校教員の働き方改善はなかったかもしれない。同校では、何をどう改善するかというビジョンに基づいて、ハード機器の導入に加えてポータルアプリなどソフト面の充実を図り、運用ルールも工夫。苦手な教員のために研修も継続して実施している。だからその成功例だろう。「世の中の流れだから」ではなく、明確な設計ビジョンに基づきさまざまな環境整備が大切なようだ。